

# 進路だより号外

2017～2018 第10号

発行  
栃木県立盲学校  
進路指導部

## 関進協第2回研究協議会での講話から

保護者の皆さん、こんにちは。

今回の「号外」では、先日長野で開催された関東甲信越地区盲学校の進路指導連絡協議会にて行われた講演会のお話をお伝えします。株式会社JINSでヘルスキーパー（企業内理療師）として働いている全盲の女性が、これまで歩んできた道についての講演でした。参考になれば幸いです。

【講師】臼田瑠美（うすだるみ）氏

- ・長野県立長野盲学校高等部普通科卒業後、筑波大学附属視覚特別支援学校専攻科理療科に進学。三療の資格を取得し、ヘルスキーパーとして企業就労。(株)JINSは2社目となる。転職の理由は「特に前の会社には不満がなかったが、自分の能力をより活かせる会社に行きたかったから」とのこと。
- ・幼稚部から長野盲学校に通学を始める。自宅から盲学校までは片道70kmあり、地元の保育園に2日、盲学校幼稚部に3日通っていた。
- ・幼稚部時代から、母親は瑠美さんの手を引いて100分かけて自家用車、電車、路線バスを乗り継ぎ、通学した。「いずれ社会に出たら一人でどこにでも行けるようにならなければ」という考えを母親は行動で示してきた。
- ・小学部5年生から路線バスを使っての自主通学、中学部入学後は電車もそこに加わった。長野は地方都市なので車社会であったが、母親の意識は違っていた。
- ・小学部の時に開催された冬季五輪長野大会において、オープニングセレモニーに参加した。(現在もyoutubeで見られる)全盲の身でダンスの練習はとてもきつく、何度も泣いたり大声を出したりしてしまったとのことだが、周囲のサポートもあってダンスを「やり抜いた」ことは大きな財産となっている。歌手の森山良子さんと手をつないだこともよい思い出。
- ・中学卒業時の進路選択について、附属盲への進学も考えたが学力に不安があり断念。長野盲学校高等部に進学した。高等部卒業時に、周囲からは大学進学を勧められたが、「自分のことは自分で決めたい」ということで、三療の資格を取るために附属盲へ進学することを決意する。
- ・附属盲専攻科卒業後の進路としては教員養成系大学に通うという選択肢もあったが、「早くお金を稼いで自立したかった」ので、ヘルスキーパーとして就職した。
- ・就職に関しては、親は地元に戻ってきて欲しかったようだが、自分は東京で就職することに決めていた。理由は、「若いうちに都会の冷たさを味わってみよう(笑)」。

- ・社会人になりたての頃、渋谷への通勤は毎日が「地獄」のようだった。白杖を蹴飛ばされ方向を見失うことは日常茶飯事、時には「目の見えない人がこんな人混みを歩いて、迷惑だと分からないのか！」という心ない言葉を浴びせられたことも。しかし、それでもめげなかった理由は、「自分で決めたことだから」。
- ・健常者の中に混じって仕事をしてしばらくすると、自己の存在意義について疑問が湧出してきた。「私がここにいる意味は何？」「マッサージだけならロボットでもできるのでは？」しかし、同僚から「楽になったよ」と声をかけられたり、自分一人ではできないタオルの色分けなどをさりげなく手伝ってもらったりしているうちに、「誰かがいつもどこかで助けてくれている」「私も役に立っているのでは」ということに気がついた。「ふり返ると、学校は常に守られた環境であり、誰かに感謝するという意識が持ちにくくなる。」とのことだった。
- ・マッサージを受けに来る同僚に、精神的な癒やしも提供できたらいいな、と考え『産業カウンセラー』の資格を取得した。理療家には、『傾聴』のスキルはとても大切で、「話を聴いてあげていると筋肉も自然にほぐれてくる」のだそうだ。他にも『アロマセラピスト』『秘書検定』を取得した。「大人になってからの勉強はとても楽しい」とのこと。
- ・今後の夢は、「東京五輪に何らかの形で関わりたい。」
- ・東京での生活は、「多くの人との出会いがあり、充実している。コミュニケーション能力は本当に大切だと思う。」「なかなか全盲の独り暮らしに部屋を貸してくれるところがなくて困ったことがある。」
- ・普段の心がけは「どんな些細なことでも感謝すること。あとは見えないからこそ身だしなみには十分すぎるほど配慮する。」

### 【母親の話】

- ・盲学校には、子育ての手本となる保護者、モデルになるたくましい先輩、頼りになる先生がいた。そのことが自分の子育てを支えてくれた。
- ・この子は目が見えないだけ。他の子と同じように生きていかなければならない。できるだけ厳しく接してくれるように、保育園時代から先生方をお願いしてきた。

臼田さんは、こう言うのは失礼ですが、「全盲のハンデを抱えながらも一流大学に進学し、弁護士になったり企業の最前線で活躍したりしている」といった、就労支援機関の成功事例に載ってしまうようなスーパーエリート視覚障害者ではありません。学業成績は普通、運動でも大きな大会の表彰実績のない、「ごく普通」の卒業生と言えます。

しかし、臼田さんの考え方や母親の子育て観には、とても教唆的な言葉が多く含まれていると感じます。特に、「自分で決めたことだから」という臼田さんの考え方の軸は、昨今言われる「自己責任論」とは違ったニュアンスで、私自身、教員としても子を持つ親としても、大変考えさせられる言葉でした。どうすればそんな立派な人間に成長するのだろう、という疑問は大人であれば誰もが持ちますが、その答えを握っているのも案外大人なのかもしれません。